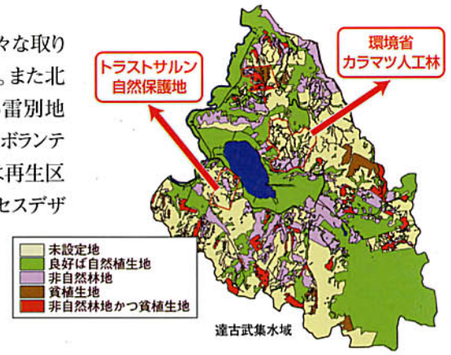
森林再生小委員会が、実施していること。これから実施したいこと。

平成15年度の調査・検討結果及び平成16年度の調査・検討方針について

環境省とNPO法人トラストサルン釧路が共同で実施している達古武地域は平成14年度から各種調査を行い、平成15年度に再生検討ベースマップを作成しました。このマップを基に目標となる森林の抽出、モデル地域の選定などを行い、基本計画を策定しました。平成16年度からは基本計画に沿って、良好な自然林の保全と荒廃・劣化した森林の再生に向けて様々な取り組みを進めていくことになります。また北海道森林管理局が実施している雷別地区については、これまで行ってきたボランティア植樹に加え、平成16年度からは再生区域、事業内容、全体計画などプロセスデザインを検討していくことになります。



達古武地域森林再生について

基本方針

達古武地域は、集水域全体を統括的に捉え森林再生を進めていきます。進めるに当たっては、良好な自然林の保全を優先し、その上で荒廃、劣化した森林の再生を目指します。再生に当たっては、森林の回復状況や生育阻害要因の把握・分析、作業道からの土砂流出防止など、立地特性に応じたゾーニングを行い、再生手法を検討します。再生手法の検討においては「順応的管理」の考え方に基づき、実験を行いながら、自然の力で回復する手法を優先します。自然の再生状況をモニタリングし、上手くいかない場合には柔軟に方法を見直しながら最適な手法を見いだしていきます。

また、良好な自然林の保全に当たっては、保全が必要な森林の37%を林業関係の会社が所有していることから、これらの会社と森林保護のためのネットワークの構築を進めるとともに、地域内の90%以上が民有林であることから、今まで以上に湿原生態系に配慮した民有林行政が進められるよう関係機関に働きかけを行っていきます。

出席した林業関係会社からのコメント

●日本製紙（株）は標茶町側に260haほど社有林を持っている。現在、9割以上がトドマツ、エゾマツの人工林という施業体系となっているが、今後の経営方針としては自然の力を利用して元の天然林に換えていきたいという基本計画でやっている。その為、間伐を行いながら、その中で生えてきた広葉樹はそのまま残存木として保存していく経営をしている。

●達古武地域にある王子製紙（株）の社有林については、機能的に保全林として位置づけている。保水力、土の保持力などの優れた森林、下層植生の発達した森林を目標としている。今後は、カラマツ人工林を広葉樹の入った針広混交の複層林へ誘導することを検討したい。

モニタリングについて

自然林再生の目標は、本来の生態系の復元であるため、樹木の大きさや景観ではなく生態系の質で評価していくことにしています。複雑な生態系を指標化することは難しいですが、森林再生の方向性や到達度を検証していくためには、森林生態系を構成する動植物の調査を実施し、数値で客観的に比較できる指標が求められます。委員会ではこうした考え方を踏まえて、生態系指標を用いた評価とモニタリング調査の現状や今後の進め方などについて意見交換をしました。

このようなことが話し合われました

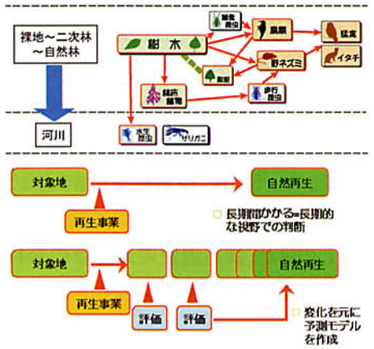
●委員長　●委員　●事務局

●指標を用いての評価、モニタリングを行うことは大事なことだと思う。例えば河川の蛇行復元でいうと、今の生態系のままでも良いのではないかという意見がある。今後こういうものも参考にしていきたいので、今回の指標調査で、どういう優位性が判ったのかを教えてほしい。

●生態系の機能は指標としてはかなり難しいものなので、とりあえず目標とするような場所の森林で、どういう生き物がいて、どういう状態なのかというのを見て、それに近づけていくのがひとつの評価だと思う。

●自然再生を機能論でやってしまうとあまり良くない。元々あった多様な生態系に戻すという前提があって、その結果として色々な生物が棲める場所ができるという評価の仕方のほうがいいと思う。

●生物の多様性の保全というのは、単に生物の種が多ければいいということではなく、過去の生物の多様性を理想の形として、それに近づけることだと思う。森林の生物の多様性だけに注目するのではなく、草原性の種や水辺の生物の多様性についても考慮したらいいのではないか。

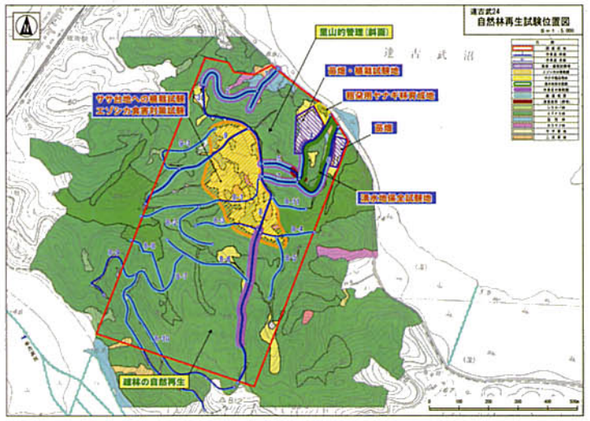


達古武地域における動植物の関わりとモニタリングの考え方

森林再生モデル地区における自然再生計画

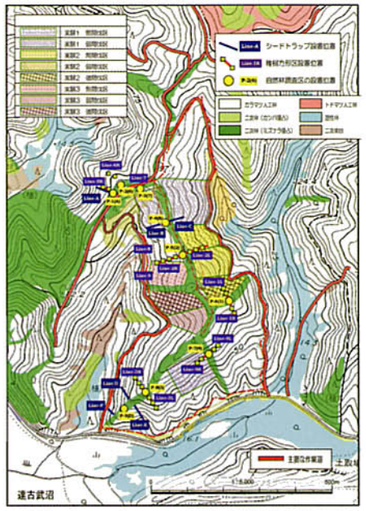
◆NPO法人トラストサルン釧路自然保護地

森林再生モデル地区であるNPO法人トラストサルン釧路の自然保護地では、生育阻害要因などの各種調査結果に基づき、対象地域のゾーニングを行い、湿原や森林並びに水域環境の質の向上のための森林再生モデル計画を作成しました。平成16年度からはモデル計画に基づき、エゾシカ被食対策、地元産苗木による植栽、作業道からの土砂流出防止対策などによる自然林再生を地域住民や市民との連携にも配慮しながら、試験的に進めていきます。



◆カラマツ人工林での自然林再生実験計画

カラマツ人工林では、生物の多様性及び森林機能を総合的に高めて、本来成立していた落葉広葉樹林へ徐々に再生していくことを検討しています。平成15年度は、広葉樹林化を阻害している要因や逆に促進させる要因について調査を行い、その結果をもとに阻害要因を除去することにより、広葉樹の更新を促進させるための実験計画の検討を行いました。平成16年度は、この実験計画に基づき、小規模な実験を実施していきます。



森林再生モデル地区（カラマツ人工林）自然林再生調査・計画図（案）

このようなことが話し合われました

●委員長　●委員　●事務局

●環境省のカラマツ林について、100年のカラマツ林にしたら素晴らしいと思う。そういった場所も残しつつ、それを対象区としながら、実験的に広葉樹を入れていくことを考えたほうが良いのではないか。

●カラマツ林の実験では条件を揃えた実験区を作り、稚樹が育たない原因がシカの採餌圧の影響なのかをはっきりさせる必要があるのではないか。

●今回カラマツ林では、いろんな試験区を設けるとのことだが、択伐的に切るのか、群状に穴をあけて切るのか、スパッと切るのか具体的な説明がなされていない。ミズナラに関しては萌芽更新をかなりする樹種だと考えているが、もう少し様子を見てからやった方がいいのでは。

●カラマツを立派に育てつつ、尾根の母樹林から広葉樹の森林化を促して、広葉樹林に移行したいと、大方針として考えている。そのために必要最低限どのように手を加えたら効果的に広葉樹に移行するのかを調査のみでなく、ある程度手を加えて、実験していかないと答えが見えてこない。

●間伐率や方法については、現在検討中ではあるが、本委員会の意見も反映させながら、現場でも更に精査したうえで、早ければ9月頃から実験を始めていきたい。

●結果については、2、3年あるいは数年掛けないと見えてこないものもあると思う。全体の計画については、今回の実験結果を見ながら考えていきたい。

●実験については、現地の「稚樹の有無」、「エゾシカの被食圧」、「林床のササの問題」、「母樹からの距離」など4つ位を基軸として考えられているとこのことで、これについては良いかと思うが、具体的な方法については、個別によく携わられている先生方や、実際に施業に携わっている方々のコメントを聞いて、この大筋のラインから離れなくて、しかも土砂が出るようなことをしないという前提であれば、問題はないと考える。

●いずれは更新して広葉樹、或いは針葉樹も入っていた自然の林に戻っていき、多様な生き物が生きられる林になってほしいと思う。

●最終的に、釧路湿原にとってよい働きかけができる森を作るにはどうしたらいいかという立場で考えていけばいいと思う。

このようなことが話し合われました

●委員長　●委員　●事務局

●シカ対策については、こうすれば大丈夫だという決定打は、最初からないと考えた方がよい。道立林業試験場等でのエゾシカの保全・管理の研究では、稚樹が大体30cmを超え、シカの生息密度が高ければほとんど全滅することが判っているので、シカ密度の指標を何らかの形で採らないと、今後のモニタリングが不十分になると思う。

●シカの影響は一番大きいが、最近ウサギが随分増えてきて、シカ柵関係なしに食べられている。今日視察した場所でも、ウサギ・ネズミの両方に喰われていた。十勝三股では、シカ対策として大きな防鹿柵の中に、決して飛び越えられない2m四方くらいのフェンスを作っている。

●苗木については、根が3年経っていて、地上部が1年という3分の1苗の方が、山に植えるとき活力があってよく伸びることがある。

●現地の広葉樹の多くがヒコバエになっている。このままでは良い木になっていかないし、種子の実りも悪い。1本にして明るくすれば、枝ぶりも良くなり、種子も実りやすくなる。また、林床に光が通って、他の木も生えてくるようになるのでヒコバエだけはきちんとした方が良いと思う。